

誰かどこかで

永六輔・崎
南海子編

七四の唄



永六輔・崎
南海子編

誰かとどこかで ——七田の唄



中央公論社

誰かとどこかで一七円の唄

定価 880 円

昭和56年 3 月27日印刷

昭和56年 4 月 7 日発行

©1981 検印廃止

編者 永 六輔
崎南海子

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋 2 丁目 8 番 7 号 振替東京 2—34

誰かとどこかで一七円の唄 目次

「七円の唄」の唄

永 六 輔 5

「誰かとどこかで」の歩み

遠藤泰子 9

恋すると

13

ひとりごと

41

女のひとりごと

44

男のひとりごと

71

季節の風にのせて

93

春

96

夏

116

秋

135

冬

153

妻と夫の時間

173

旅・ふるさと

205

旅

208

ふるさと

226

海から生まれた女と風と旅する男の七円の唄

236

崎南海子

装幀・カット

野本みどり

「七円の唄」の唄

はがき 書くの好きだ

はがき 読むの好きだ

キャンパスでいう一号ほどの

大きさが好きだ

絵はがき 好きだ

どこへ行っても絵はがきを買う

夕陽の絵はがきを残して

どんどん書く

誰が読んでもいいような

何げない一言を 選んで書く

最後には自分にも書く

友達に 一年で

六万枚のはがきを書いた男がいる

一九八〇年

僕は彼に挑戦したが

三万枚弱に終った

それでも 大変だった

番組あて 局あて 自宅あて

すべての手紙に返事を書きつづけた

返事を書く前の読む作業

そして宛名を書きながら

短かい返事を考える

毎日百枚というノルマが

仕事のためにおくれてゆく

それでも 書きつづけた

一九八一年

まだ机の上に五千通ほど……

自分の仕事も たまってしまうて

一寸 ノイローゼ状態

——そんな中で

「誰かどこかで」の「七円の唄」は

ラジオで読むことが返事になる

上手に読もうとは思わない

素直に読もうと思う

崎南海子さんの選び方も

はがきの意味を大切にしている

書かれた背景に想いをこめている

その番組あてのはがきから選ばれた

この一冊

これは この番組を支えて下さった

皆さんへの返事でもある

あなたも 声を出して
僕や 泰子サンより上手に
読んで下さい

永
六
輔

「誰かとどこかで」の歩み

皆様御存知のように、民放の番組には、スポンサーという大事な存在がごいます。

皆さんには、時々誤解がある場合があるようでして、例えば、スポンサーすなわちコマーシャルがなければ……ということですが、私の考えでは、番組（あるいはその出演者達）とスポンサーの関係は、いわば「夫婦」のようなものです。

お互い相手がいないといけないでさびしいし、いればいたで時々わずらわしい時もある。にくたらしい時もあれば、頼りがいがある程、好きな時もある。

「誰かとどこかで」は、今のスポンサー（桃屋サン）と一緒にいる前は、旧姓を、「どこか遠くへ」と言いました、一九六七年（昭和四十二年）の一月一日に誕生致しました。

そして一九七一年（昭和四十六年）縁あって一緒にになり、あしかけ十一年程すごしてまいりました。

世間様と全く同じでございまして、似合いの夫婦もあれば、破局寸前のそれもあるというなかでは、比較的夫婦仲の円満な方でして、お互い全く不満がないと言え、嘘になりましようが、今では、広い放送界の中でもその仲の良さ、息の長さでは、一、二位を争う程になってしまいま

した。(なお、一部地域では若干他のスポンサーで提供しているところもありますが、その点は悪しからず)

「七円の唄」という可愛い子供が生まれましたのは、一緒になって間もなくの頃でございます。幸いにも、崎南海子さんという大変やさしい、乳母と言いましょるか、看護婦さんと言いましょるか、先生と言いましょるか、素晴らしい人に育てられ、今や親をしのぐ程の大きな息子(娘)に成長致しました。

「台所の片すみで、ふと思いついた詩、言葉、俳句、その他なんでも、葉書のスペースに書ける範囲内で」という呼びかけに応じて下さった方は、もう十万人に達することでしょう。

丁度その頃、葉書が七円でしたので、「七円の唄」と名付けたのでございます。

その後、葉書は、十円、二十円、三十円、四十円と、約五・七倍に値上りしてしまいました。敢えて郵政省さまに逆らって、「七円の唄」という名前を頑固に守り続けている次第なのです。

思い出してみますと、番組の始まりました頃は、旅の話題が大部分で、永さんの旅先でのいろいろ、取材旅行の報告談といった内容でしたが、永さんが歌手になりましたからは、歌のこと、友達のこと、そして、御存知、尺貫法・くじら尺についてのこと、そして今は、障害者との会話、連帯のこと、永さんの主たる関心事は少しずつ変わってきたのですが、「七円の唄」だけは、聴取者の御葉書を崎南海子さんに選んでいただき、私が朗読をするというスタイルを変えずにやってきております。

細かく見れば、時代は変わっているのですが、御葉書の内容は、相変らず、子供の成長を喜ぶ母の顔、料理の出来上りに一人ほくそえむ主婦の顔、つましくもしっかりした幸せな人生に満足した女の顔といったものが、かいま見えする楽しい素敵なもので一杯です。

そういった「七円の唄」が大きく成長して親を追いつく程になってまいりました。

あるいは、素晴らしい人を見付けて、新しい「夫婦」が生れるかもしれない様子です。

今度、先程のたとえで言いますなら、子供の「七円の唄」が中央公論社さんのおかげで本になるとのこと、本当にうれしいことです。

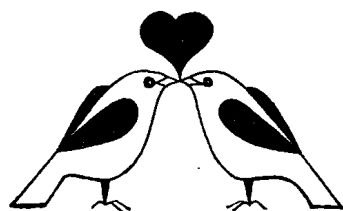
皆さまのお力ぞえがありますれば、この子供もどんどん大きくなり、更に、第二、第三の本が生れることも可能かと思えます。

応援してあげて下さい。

お願い致します。

遠藤泰子

恋すると



指さきで空に触れたことがありました。

散歩に出ようと、路地から広い通りへ町角を曲ったとたん、私はそよ風にすっぽりと包まれていました。

生まれて初めての重い病いで入院したあと、澱んでいた疲れが洗い流されて、体に新しいエネルギーが満ち始めた頃です。

指さきの細胞がかすかにふくらんで熱く、そのうすい皮膚を通して、頭のなかに言葉が生まれるよりも早く、言葉の意味よりも早く、私は風に触れていました。

ふるえる風は、吹いてきた向うの町並や、その向うの空の振動をただ私に伝えます。指さきは確かに空に触れていました。

あっ風だとすこし遅れて言葉が生まれてきました。

うすい皮膚に包まれた体はどこか頼りなく、でもとても敏感でした。生まれたての赤ちゃんはこんなふうに風を感じているのだとその時、思いました。

心もじかに世界に触れることがあります。

縮こまっていた精神から、ひびわれた殻が剝れ落ちて、つやつやの皮膚が風に吹かれます。

恋の始まりはいつもそうです。

言葉で説明されなくても、人間の心の振動を鋭く感じ始めます。好きになった人のことだけで